

担い手三法改正で 建築の仕事はどう変わる

早稲田大学次世代建設産業モデル研究会主宰 五十嵐 健

BSIJ-CPD 認定記事 1単位

分かりにくい担い手三法の改正

昨年7月に品確法と建設業法、入契法等の、いわゆる担い手三法の改正があった。その趣旨は、学校などの公共建築や道路・橋梁などインフラ等の品質確保とその担い手確保を実現するものだという。

しかし、品確法を中心に、密接に関連する「入契法」「建設業法」も一体として改正しているため、改正事項が多岐にわたり、関係部分が分散していることなど、分かりにくい点も多い。

今回の改正は、社会環境の変化にともなう基本理念と関連する緊急対応事項について、第1弾の改正として行われたものである。今後はその基本理念や改正点に沿って順次関連制度が整備され、将来的には公共の仕事だけでなく民間の仕事のやり方もかわっていくだろう。

このため、私たちの仕事にも影響が大きいと考えている。今回は担い手三法改正の背景と、今後の我々の仕事への影響について考えてみたい。

高度成長社会から成熟社会への転換

まず、担い手三法の改正に至った背景から考えると、この10余年の建設産業の置かれた社会環境に基本的な転換があったことが挙げられる。

1990年初頭のバブル以降、日本は高度成長経済から成熟型経済に移行した。それまで戦後45年余り、経済は成長を続けてきたが、これを境に右肩上がりの成長が止まり、ゼロサム型の社会に移行した。

その背景には、出生率の低下と平均寿命の上昇による、人口減少社会への転換がある。その転換点は2004年頃で、それ以降日本の人口は減少し、高齢化も進行した。それは社会負担の増加と就業世代の減少を意味し、結果経済活力は低下する。

建設産業は経済や生活の基盤を整備する産業で、当然国内の人口が減少し経済活動が低下していけば、建設投資も減少する。そのため、1991年から



五十嵐 健 (いがらし たけし)

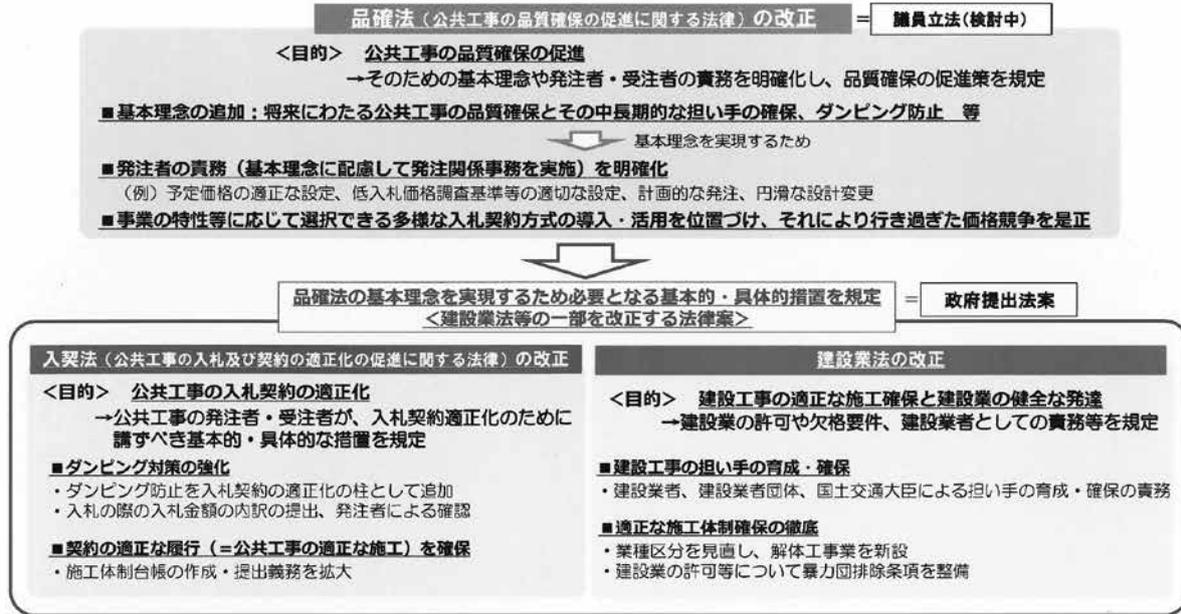
早稲田大学理工学術院総合研究所招聘研究員
早稲田大学次世代建設産業モデル研究会主宰
日本建築学会建築施設マネジメント小委員会委員

1943年生まれ。博士(工学・早稲田大学[専門:建築経済、建設経営、地域経営])
不動産建設(現株不動産テトラ)取締役の後、現職。
著書:『建設産業、新“勝利の方程式”』
『200年住宅のすすめ—長く使える家の経済学』
(以上日刊建設通信新聞社刊)
『地域創造計画ハンドブック』(共著、鹿島出版会)
『建築産業再生のためのマネジメント講座』(共著、早稲田大学出版会)

品確法と建設業法・入契法等の一体的改正について

資料6 国土交通省

インフラ等の品質確保とその担い手確保を実現するため、公共工事の基本となる「品確法」を中心に、密接に関連する「入契法」、「建設業法」も一体として改正。



国土交通省資料より

2010年までの20年間、建設投資額は年平均3.8%の減少で市場は80兆円台から40兆円台に半減し、その間企業は非常に厳しい状況に置かれた。

生活環境と産業基盤の担い手としての産業

そして、2011年の東日本大震災を機に、日本の建設投資額は再び上昇を始める。その後、アベノミクスによる公共投資の増加もあって、2013年には50兆円まで回復した。私の見立てでは、この40兆円台後半から50兆円が、現在の日本の建設投資額の必要額ではないかと考えている。

そう考えると、これまでの20年間は高度成長から成熟社会への転換期の需給調整にあたるが、2010年までに絞られた40兆円規模の投資額では、日本の社会基盤や生活環境を持続的に維持していくことは難しく、ゼロサム型の厳しい経済環境と税収の中で、いかに今の建設施設の利用環境を維持していく、産業構造を構築するかが課題となる。

今回の改正は、そのために国づくり・地域づくりの担い手としての建設産業を、いかに健全な形で育成していくかという視点で改訂されたものだ。

品確法に、建設産業の育成政策を位置付け

そうした、長期的な視点による建設投資の動向や、バブル崩壊以降の建設産業政策の変遷については、本誌新春号の「潮目の変わる今、その流れを考える」に書いているので、関心のある方はそれを見なおしていただきたい。ここでは、担い手三法の改正による今後への影響について考えるため論を進める。

そのためにまず、「公共工事の品質確保の促進に関する法律」(以下品確法)の改正が行われた。以下、上の図を参考にしながら読んでもらいたい。

その改正の目的は、品確法の基本理念や発注者・受注者の責務を明確化し、品質確保の促進策を規定することで、基本理念としてこれまでの公共施設の品質具現に関する項目のほかに、それを造る担い手の中長期的な確保・育成が加えられた。

これは、これまで国の政策課題になかったことで、国土交通政策としてインフラ施設の整備とともに、その担い手である建設産業の育成について明文化したものだ。

その意図するところは、すでに2012年に発表された「建設産業の再生と発展のための方策」に書かれて

いるように、「将来的にも地域を支え得る足腰の強い建設産業の構築」と「建設産業に求められる多様なニーズ・役割への対応」である。

担い手としての健全な産業と人材の確保

今回の建設市場の回復で明らかになったように、この10余年間の建設現場を支える、職人をはじめとする就業者の高齢化と減少は深刻な問題で、今後5年以内には高齢のために2割近くが退職するだろうと言われている。

地域のインフラが良好に維持され経済活動が持続するためには、その仕事を担う建設産業と、その中で働く人の存在が必要になる。一昨年来の大型公共投資の実施は、そうした産業の疲弊と人材の弱体化に対する緊急対応として実施されたものでもあるが、図らずも、現場人材の弱体化の実態を浮き彫りにすることになった。

そのため、建設産業とそこに働く人材の処遇改善策として、①低入札価格調査基準の見直し、②公共工事設計労務単価の引き上げ、③社会保険等未加入対策などが矢継ぎ早に実施された。

今回の法改正は、そうした施策を補強し恒久的なフレームを作って、中長期的に推進していくための改正である。そのためには事業予算の安定的な確保も重要であり、これまでの施策の中でもそれは試行的に行われているが、今後そのための制度整備がさらに進むことになるだろう。

入札契約制度の大胆な改革

そのためには、地方公共団体や事業者等の意見を聞いて発注者共通のルールとなる指針を策定する必要がある。今回の入札制度の改革ではその前提となる基本精神を大きく変更しているのが特徴だ。

これまでの日本の公共事業の契約制度は、明治以来の請負制を基本に発展してきた。それに産業の近代化やグローバル化の進展に伴う変更や修正が加えられ、今日に至っている。

しかし、その基本精神や手法には、それまでの慣行が強く残っている。一つは発注仕様書の品質は一定で、それを造る側の企業努力が入札価格に表れるため、一般的に最も安い入札額を入れた企業が受注することが、最も公平なやり方であるという考えが基本になっている。

そのために、最低入札価格を巡ってし烈な情報合戦が行われるが、その後の造り方については、厳正な発注者の監理のもとで、受発注者相互の打ち合わせによる比較的裁量幅の多い変更が行われ、最終的に発注者

の満足する要求品質のものを造るというやり方が行われてきた。

その結果、本誌春号の「進むグローバル化と変わる建築コストの仕事」の稿で挙げたような、欧米とのやり方の違いが今も見られる。

最低価格による業者決定の改定

今回の改正では、まず中長期的な担い手の確保のためには、行き過ぎた価格競争を是正しダンピングを防止することが第一と考え、最低価格による受注者の決定を改めたことだ。これは適正価格内の範囲なら安ければよいという、これまでの入札の基本思想がなくなったことで、これは大改革だ。

そのため、品質の確保と価格の合理性を実現するために、多様な入札契約方法の活用を品格法の中に位置付けるとともに、予定価格の適正な設定、計画的発注、円滑な設計変更など、発注者の責務を織り込んだことだ。

価格以外の評価の中には、その工事にかかわる技術提案だけでなく、地域社会への貢献活動や現場就労技能者の保険加入率など、企業体質や施工体質の向上に資する努力も加えられるため、今後最低価格のみを目指す企業活動に歯止めがかかるものと思われる。

また、そうしたやり方を改めるため、発注者責任対策の一つとして「歩切り」の禁止が明確に打ち出された。これまで、最低価格による入札契約の目安となる予算設定に際し、論理的に算出した予算からさらに一定割合を差し引くやり方が慣行化している発注者もあった。

こうした変更は、自治体の要員や体制の整備もあり、一気に実施されているわけではないが、国の直轄工事や都道府県の工事では、最近の調査ですでに実施件数も増加しており、今後は順次地方自治体まで展開が進むと思われる。

担い手不足対策の今後の展開と対応

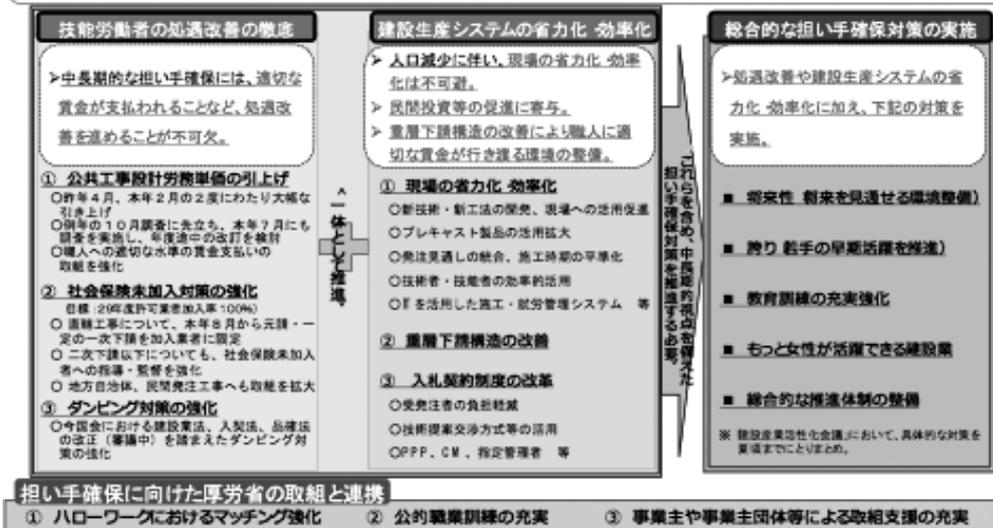
次のページの図は、建設業の担い手不足対策について、建設業法改訂後の展開課題を国土交通省が挙げたものだ。積算技術者も担い手の一人であり、担い手不足の状況も同様だ。

その中で、今回の改定とその後の展開にどのように対応していったらよいのか考えてみたい。

この図の左側の「技能労働者の処遇改善の徹底」は、すでにこれまでの緊急対策で採られた対策だ。①公共工事設計労務単価の引き上げはすでに昨年・一昨年と実施された。②の社会保険未加入対策費も当然その中に含まれているという。

□建設業の担い手不足対策（26年の建設業法改正後の展開課題）

- 人手不足が懸念される中、中長期的な担い手の確保・育成が喫緊の課題。職人の処遇改善が不可欠。
- 一方、少子高齢化に伴い労働者人口が減少する中、建設生産システムの省力化・効率化や重層下階構造の改善等は不可避。職人への適切な賞金の支払いのためにも必要。
- 建設産業が将来を見通せる環境整備、更なる女性の活躍を含め、中長期的視点を備えた担い手確保・育成策を講ずるべく、夏頃までにとりまとめを行い、総合的に取組を推進。



国土交通省資料より

これまで述べたように、産業が成熟化しゼロサム型の社会に移行した現在、その上昇分を不動産価格など最終商品価格に転嫁することは難しい。今回の大幅かつ久しぶりの改定は社会を覚醒させるためにも有効だったが、今後は産業内部の省力化と効率化によってこれをねん出していく必要があるだろう。

右側の「総合的な担い手確保対策の実施」の枠は今後の課題であるが、若手や女性の活躍に向けた環境整備や教育訓練の充実、安定的な業務の発注などが挙げられている。

建築コスト業務の効率化・省力化

真中の「建設生産システムの省力化・効率化」は、主に工事現場での効率化の施策で、ゼロサム型社会の下で建設産業内部の要因による価格の引き上げは難しく、建設生産システムの省力化・効率化による就労環境の改善が重要になる。

この図は、主に工事現場での効率の施策について書かれているが、積算設計など建築ソフトの仕事についてはどうだろうか。

近年モバイル端末の発達が目覚ましく、またここ数年試行段階にあったBIMも、ようやく実用化の段階に入ってきた。建物や地形の現状を把握する3次元スキャナーも普及しつつある。そうした建築ソフトを上手に活用していけば、積算業務の効率も上がる。

一方で、建築施設のコストパフォーマンス向上の要求の高まりから、積算関連の仕事として対品質コストをいかに向上させるかという、CCMに関する業務が増加する傾向にある。今回の入契法の改正では、同一仕様でのコスト競争より、対品質コストでの優位性が重視されることになり、この傾向がさらに高まることが考えられる。

また、高度に専門分化された建築生産の中で大きく効率性を高めるためには、関連する業務との連携による効率化・省力化が重要になる。特にBIMはその可能性を高めるツールであり、その普及によって、設計段階、施工段階ともにコスト業務の範囲と内容が大きく変わる可能性がある。

建設産業は「人が主体のシステム産業」である。今後は、担い手三法の改正と、それにとまなうコスト業務の変化の方向を見極めながら、個人の持つ知的能力の発揮できる業務や、関連業務との連携による効率化について考えていく必要もあるだろう。

実録フィクション

さいはての CMr (コンストラクション・マネジャー)

第 3 回

加納恒也

公益社団法人 日本建築積算協会
副会長・専務理事

[登場人物] 2015年……東京

天野清志：一ツ木PM顧問、居眠り清じい
 財前一義：夢設計コスト管理統括部長、KM協会ガイカク委員会委員
 金剛辰雄：六星設計CM部長、KM協会ガイカク委員会委員長
 新川哲也：和光設備営業部長、KM協会ガイカク委員会委員
 桐山寛之：一ツ木PM社長、大杉設計取締役
 小林啓二：一ツ木PM取締役、小林積算取締役
 丹野雅成：一ツ木PM取締役CM部長

2000年……今宮市海崎プロジェクト

天野清志：高尾建築研究所チーフ・コンストラクションマネジャー
 今宮市海崎PJ・CMr
 高尾 哲：高尾建築事務所・高尾建築研究所社長
 小南由之：高尾建築事務所常務取締役
 吉野 清：高尾建築事務所取締役
 矢沢周吉：今宮市プロジェクト推進室長
 逸見紅郎：逸見設計事務所代表取締役、今宮市在住
 長浦 浩：長浦構造設計事務所代表取締役、今宮市在住
 岡本照泰：鷺田大学理工研究センター研究員、設計ゼネラルマネジャー

SCENE 7

再び、一ツ木PM会議室(2015年)

「いやあ、いよいよプロジェクトが動き始めましたね。」

小林は、トラブル続きだった今宮プロジェクトに興味しんしんで、どうも野次馬的な顔つきになっている。

「おいおい小林さん、僕たちが天野さんにお話を伺うのは、今宮市のプロジェクトで実施された技術的な内容であって、スキャンダラスなトラブルではないよ。どうも興味のありようが大分違っていると思うんだがね。」

財前が笑いながらたしなめる。

「すみません。つい本音ができました。皆さんは、そんなところには興味もないのでしょうかね。」

啓二は、開き直ったように笑っている。

「まあ、今宮で起こったことは、建築界の縮図のようなものですから、お話しすることも参考になるのかもしれませんが。特に、最近国民的な関心を持っている新国立競技場と似通った構図でもありますしね。」

天野もビールを片手に笑いながら応じる。

「天野さん、少し順番が違うと思いますが、そのあたりからお話しいただけないでしょうか。今回の新国立競技場の問題では釈然としないところが多いもので、今宮プロジェクトのお話とからめて、皆さん方にもいろいろ教えていただきたいと思っています。いかがでしょうか。」

啓二が前のめりに畳み掛ける。

「いやはや天野さん、恐縮ですがよろしくお願います。折角ですから、新国立競技場に対して皆さ

んが感じている疑問や思いについて吐き出してみましようか。」

桐山も、やはり野次馬の顔になった。

SCENE8

今宮プロジェクトの悲劇

「さて、今宮のプロジェクトにおける最大の騒動についてお話ししましょう。今日は、これで時間切れとなるでしょうから、ゆっくり飲みながら意見交換しましょう。」

天野は、啓二に飲み物の追加を頼み、話し続ける。

「先ほどお話ししたように、私は2000年2月の終わり頃に本格的に今宮プロジェクトに参加しました。3月から、補助金を確保するために、先行する土間解体工事・共通仮設工事(一部)、杭工事(約半分)について、入札も終わり、3月末の出来高確保への作業に入りました。アパート探しや仮設事務所設置準備も含めた、慌ただしい毎日を過ごしていました。市が主催したCM方式の説明会や、本体工事のCM業務入札への準備、個別に発注する専門工事手続き策定等の準備にも追われていました。」

状況を理解していただくために多少前置きが長くなりますがご了解ください、と言いそえながら天野は続ける。

「中抜きで話を進めますが、設計業務としての成果品納入は、公共工事予算の単年度主義で定められた3月下旬でした。当然そこには「工事費設計書」つまり設計予算内訳明細書も含まれていたわけです。ただし実態は、設計図の完成度も低く、工事費設計書も精度の点では制約があったものと考えられます。

そして、その時点で“予算を大幅にオーバー”したために、応急措置として“数量や単価の一部を調整”したという噂が聞こえてきました。どのようなレベルの“調整”なのか気にはなったのですが、忙しさに紛れ時間が過ぎていきました。内訳明細書自体も、しばらくは入手出来ませんでした。

いずれにしても、実質的に図面が完成した時点で再度積算を行い、正式の“工事費設計書”を確認する必要があります。その後、どのように3月下旬に納品された“工事費設計書”と整合させるのか、交

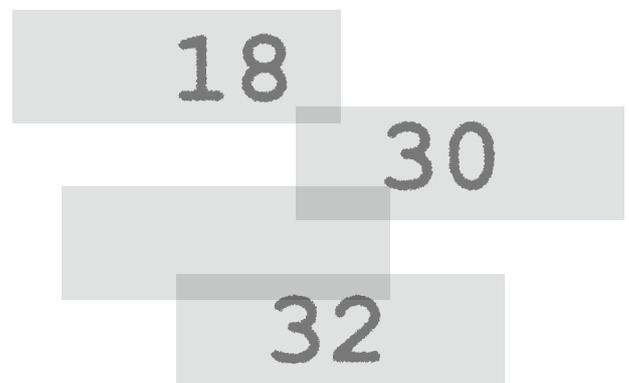
換できるのかは、今後の課題として具体的な方策は浮かんでいないようでした。

◆ 驚愕の事実

5月中旬、ようやく本来の積算が完了し、本物の“工事費設計書”が出来上がりました。3月下旬の工事金額「約18億円」に対して「約32億円」となっていました。しかも、設備機器類等公共工事の単価基準が時勢価格と大きく乖離しているものについては、実勢価格近くまで引き下げた価格レベルにした金額でした。これを全て公共工事の単価基準に合わせた場合は、さらに予算との差が開くこととなりますので、CM方式による分割発注を前提として、実勢価格をベースにした工事金額を採用したものです。

この「32億円」という事実を受け取ったCMrとしては、市の担当者に報告するしかありません。市の担当者もいづらか予算をオーバーしているように感じていたのかもしれませんが、しかし、この報告はあまりにも衝撃的でした。

なぜこのような大きな差異が生じたのか、設計関係者へのヒアリングを行いました。3月下旬に算定された工事費は、「約30億円」となったようです。しかし、この金額のままでは“工事費設計書”として納品できません。今回の入札・契約方式は、分割



発注を行うCM方式であり、4月の本工事入札段階では、施工者は工事管理費(フィー)のみを見積り、直接工事費は見積らないことになっていました。このため、直接工事費の数量を低減させ(70%以下に)、単価も専門工事会社あるいはメーカーの見積りへの掛け率を通常の半分に改ざん設定したものです。数量については、コンクリートの数量が延床面積当たり2㎡以上あり、改ざんの事実を簡単に判断できない状況でした。一体誰が指示をしたのか、ここからは責任のなすり合いでした。ゼネラルマネジャーとしてプロジェクト全体に責任を持ち、当然コストマネジメントの責任者である岡本氏が指揮をとったと考えるのが自然です。しかし岡本氏は、高尾建築事務所にコストマネジメントを一任していた、といった責任逃れで終始します。高尾社長は、岡本氏の指示であるが、会社としては常務の小南氏が独断で行ったような意味合いでの発言をします。市の担当者も、内容がおかしいと感じても良い状況(専門工事会社見積りの掛け率等)であったのではないかと思います。結局、責任の所在は不明確のままとなりました。

倍近くになった工事費を小手先で圧縮できないことは自明の理でしたが、まず設計者を現地に招集し、VE・CDの検討を行うことにしました。

もともと、外壁は全てハイグレードなガラスカーテンウォールで、構造体は大スパン壁式構造、各所に鉄骨・中空スラブ・ポストテンションなどが仕掛けられた混合構造です。また、建物外に様々なデザイン用の空間が設えられていました。したがって、コストを低減するネタは数多くありました。しかし、それにしても現在の内容を生かしながら設計変更を行うには限度があります。6月に入ると、新しい方向性を検討し始めました。」

天野は、ビールに飽きたのか、グラスに赤ワインを注ぎ始める。

◆ 決断

「6月初旬にVE・CD金額の限界が見えてきました。予算金額に到達するためには、構造計画をはじめとして設計を全てやり直すしかないという方向性

が、市の矢沢プロジェクト推進室長と私の間で共有されたのです。それでは、設計をやり直して本当に予算に到達するのか、次の段階としてこの検証を開始したのでした。」

「8割近く膨らんだ工事費ですから、VE・CDで下げられるものではないですよ。設計のやり直しでも目標に到達できるか、確信が持てたのですか。」

寡黙にビールを口にしていた財前が質問する。

「確かにその確信が持てないと、市長への報告も出来なかったわけです。ただ工事費が大幅に超過しました、では報告にならないですよ。」

そのために、高尾建築事務所において新しいプランの検討が開始されました。構造は地元の構造設計者である長浦氏に協力を要請し、ありふれたRCラーメン構造としました。仕上げや設備も贅肉だけでなく筋肉まで絞り上げるように、ぎりぎりの建物計画を追及した結果、工事費が予算内に納まる事が確認できました。

設計のやり直しと変更内容を整理したうえで、6月下旬に熊本市長への報告がなされました。熊本市長はびっくりしたと思いますよ。どうも設計者の岡本氏に電話をして確認したようでしたが、責任逃れの答弁に終始し、状況の確認も十分にできなかったようでした。」

「いよいよ騒ぎが大きくなっていくのですね。」

啓二が不謹慎な興味丸出しで、言葉を挟む。

「啓二さんは本当に野次馬ですね。天野さん、申し訳ありません。」

桐山が軽く頭を下げたが、その目には同じく興味のきらめきが宿っている。

「まあ、事件や事故が興味を引くのは仕方ありませんよ。当時も、新聞や雑誌に様々な形で取り上げられましたし、市内では様々な噂が飛び交ったものです。皆さんの野次馬的関心は当然ですよ。」

天野は、ワインを一口吸りながら話を続ける。

「すでに、施工管理会社(建築、電気設備、機械設備)3社の入札は完了し、落札会社も決定していました。契約に至る様々な交渉を経て、契約も締結し、ちょうど6月中旬に起工式(安全祈願祭)も行われたところでした。」

「入札時点で、工事費が乖離しているために不調

とはならなかったのですか。」

仏の金剛さんがもっともな疑問を口にする。

「以前ご説明したように、施工管理会社は現場管理費と管理報酬としての一般管理費等について、その金額を入札する仕組みとなっていました。直接工事費は、オールコストオンといった今回の仕組みにおいては、入札時点で積算する必要がなかったわけです。参考に総金額を提示しただけでした。まあ、このようなCM方式であったことが、応急措置的な予算改ざんがまかり通ってしまった原因と言われても仕方がないことだと思いますね。」

天野は、質問に答えながら話を続ける。

「7月2日に市長のヒアリングが行われました。市からは、熊本市長・芦田助役・石原総務部長そしてプロジェクトを所管する細川地域振興部長です。ヒアリング対象は、天野一人といういささか厳しい環境でした。

質問の第一は、このような事態に至った経緯と、責任の所在でした。これについては、私が今まで関係者からヒアリングした内容を説明しましたが、最も留意したことは、設計者の責任、そして設計の一部である積算とCMとはまるで異なった機能であり、同一の会社であっても、担当者も異なっていること、今回の事態を招いたのは、あくまでも設計段階でコスト管理が十分行われていなかったという点でした。高尾建築事務所が設計側で積算を担当し予算の改ざんに関与した、一方高尾建築研究所が発注者側でCMを担当し予算改ざんの事実を暴いた、というややこしい状況は、なかなか理解されるものではありませんでした。

岡本氏は、高尾建築事務所はCMに力を入れるあまりに、コスト管理がおろそかになったと、責任を積算に押し付ける発言を繰り返しています。CM方式をとったがゆえに、このような事態を招いたという意見が多くなることも予測されたのです。」

「天野さん、グラスが空ですよ。」

と、啓二がやけに気を利かせる。

「市長からの質問の二番目は、これからどのように進めるか、何か方策があるのか、というものでした。これについては、事前に検討してきたことを踏まえて、設計のやり直しについての可能性について

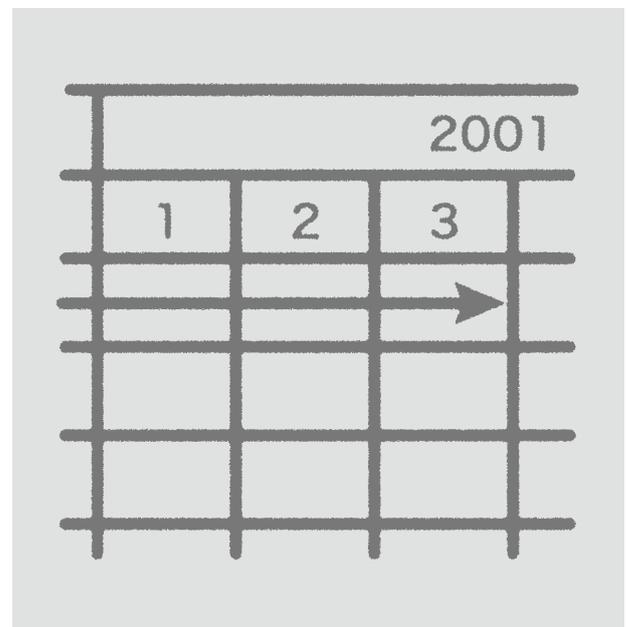
説明しました。この場での結論は、今回のプロジェクトを遂行するために、知恵を振り絞ってほしい、CMrが全面的にプロジェクトを纏め上げてほしい、という熊本市長の思いでした。

翌日、プロジェクト推進室において、今後の方向性を確認するミーティングを開催しました。

補助金を確保するための出来高、これはその年の3月と翌年の3月の末日で算定するのですが、これは何としてでも確保したい。竣工は全体では3か月程度の延期はやむを得ないが、補助金の対象となっている広域施設(物販施設)は2001年の3月末までに完成させる必要があります。つまり、広域施設の工事を優先させ、タラソテラピー施設を後ろに送る工程も選択肢に入れるということです。このような前提で、なんとしてでも予算内に工事費を抑える必要があるというのが、我々CMrに与えられたミッションでした。

このためには、設計をやり直す必要があります。ただし、約半分の杭は先行打設しています。これを活かすためには、基本的な平面プランは原型を維持する必要があります。その前提を守った上で、RCラーメン構造の2階建(原設計は3階建)に変更することになりました。

市は、現設計者ではこのような根本的な変更に対



応できないと判断し、ゼネラルマネジャーの岡本氏以下の設計担当を外し、意匠は逸見建築事務所(現設計チームではありましたが)、構造はやはり地元の長浦構造設計事務所が非公式に協力することになりました。建前上は「設計修補」で、鷺田大学理工研究センターに瑕疵の修補を命じるという形をとりました。建前上設計責任もいままでの設計者にあるのですが、実態は逸見氏と三浦氏で、高尾建築研究所つまりCMrである私が全体を統括します。公共工事における初めてのCMを完遂したいという高尾哲氏の強い思いと、その他の様々な経緯から、結局、高輪建築研究所が「設計修補」の費用を全て負担することになったのです。」

啓二についてももらったワインを口にしながら、天野は先を続ける。

「市の幹部のヒアリングが行われた数日後、岩木県への今回の状況説明が行われました。いやはや、面子をつぶされた県の担当者は、ひどい剣幕で攻め立ててきたのです。まあ、市としては黙ってひたすら謝るしかありませんでした。」

「ゼネコンでご苦労されたと思ったら、ここでも大変な目にありましたね。」

丹野は、わが身に置き換えたのか、神妙な面持ちで感想を述べる。

「どうも私が打たれ強いと誤解された面もあったのでしょうか。これ以来、議会への対応やマスコミへの対応でも前面に立たされることが多くなりました。」

7月6日に、予算超過の一件が議会に報告されました。それ以降、プロジェクトの中止や縮小あるいはCM方式の中止といった議論が1か月弱続くことになります。市議会議員からのヒアリング要請も多く、対応に追われる毎日でした。しかし、裏では粛々と再設計を進めていましたし、専門工事への分割発注の手続き準備も進めていました。

◆ 再出発

8月はじめに、プロジェクトの続行とCM方式の継続が決定され、市から設計者に対して「設計瑕疵に対する修補請求」がなされました。6月下旬から

着々と進めていた設計のやり直しが、本格的に日の目を見ることになりました。」

「しかし、よくプロジェクトの続行とCM方式の継続という結果になりましたね。相当厳しい状況でしたが。なにか秘策があったのですか。」

桐山が尋ねる。

「確かに、建設業界はここぞとばかりにCM方式の中止を叫びました。野党議員は市長の責任とプロジェクトの中止を要求したものです。特に、東北という地域性による政治的な動きも様々あったようです。実は、このような混乱を收拾していただいた方がいたのです。我々にとっては恩人といってよい方でしたが、そのご縁は私がはじめて今西を訪れた時に生まれたものでした。」

「あ、おばあちゃんですか。」

啓二が驚いた声を出した。

「縁とは不思議なものです。あのお婆さんがプロジェクトを救ってくれたのです。今日は時間がないので、詳細は後日お話ししましょう。とにかく再設計を完了し、9月はじめに設計図書を、また当然予算内に収まった「工事費設計書」も含めて、市に納入することができました。いよいよ工事が本格的に開始されました。」

これ以降、大幅な追加工事が発生し、議会对応を含めまたまた問題が続出しますが、結果としては、2001年3月末に所定の出来高を計上することが出来、CMのミッションは達成できました。プロジェクトが成功したとは思えませんが、なんとか破綻させずに2001年の9月下旬に竣工を迎えることができました。」

「やはり、予算を大幅に超過した事実を確認して、素早く報告したこと、そして熊本市長が設計のやり直しをタイミングよく明確に決断したこと、CMrが再設計を完全にコントロールしたことが、プロジェクトを完遂させた原動力だったのだと思いましたね。」

いやはや、なかなか聞けない話でしたね。有難うございました。」

財前の声に全員がうなずいた。

「しかし、今騒がれている新国立競技場は、この逆をいったような顛末ですね。」

新川が、禁断の話題に踏み込んだ。

SCENE9

新国立競技場の悲劇

「今、設計が白紙に至るまでの状況が検証されていますね。時々断片的に新聞に出っていますが。そもそも、デザインコンペとはなんだったんだろう、という素朴な疑問がありますよね。審査委員長の記者会見で、“コストは審査委員会の範疇ではない”といった趣旨の発言をされていましたね。“コストは優秀な日本のゼネコンがどうかしてくるだろう”、あるいは“利益を度外視して頑張ってもらいたい”といったように受け取れる発言もありましたね。」

丹野は、待つてましたというように、一気に話題を広げていく。

「天野さん、そもそも今回このように混乱した原因はなんだったんでしょうかね。」

財前が、天野に話を振る。

◆ デザインコンペ

「個人的な感想を言えば、デザインコンペの条件が満たされているかどうかの検証がなされていなかったのではないのでしょうか。約1,300億円という予算枠をはじめとして、様々な条件が提示されていたようですが、これを一つずつ検証したという事実は提示されていませんよね。コストについても、1,300億円に収まっているという、コスト構成等の資料を提出させることもなかったようですね。“予算内でできるから応募したのだろう”と考えたのなら、まるで甘い“性善説”だと思いますよ。当選案は規模的にも提示された条件を逸脱していたと言われていますね。」

「何人かの建築関係者が、“デザインコンペの段階では、コスト算定は不可能だ”とっていますよね。これはコストについての無理解をさらけ出した発言としか思えませんね。コストのプロであれば、この段階でもコストの算定は可能です。もちろん、一定の誤差があることも事実ですし、構造や設備の技術者あるいは施工についての専門家の参加も必要になりますが。このように、コストについて真

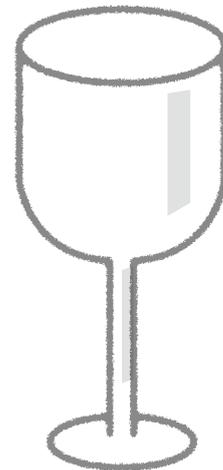
摯に検討した応募者もいたのではないかと思います。今回のようなデザインあるいは基本計画が確定した段階で、コストの70%以上が決まってしまう。このように重要な段階で、コストの検証がなおざりにされていたとしたら、審査の妥当性・公平性が疑われますね。」

財前も、一国民として腹に据えかねるようだ。

「テレビ局の方に伺ったのですが、審査委員会の模様を撮影した映像によれば、当選案を押していたのは2人だったそうです。その他の審査委員は、コストの点で懸念を表していたとのこと。しかし、コスト的に妥当かどうか審査できる資料が存在していない以上、審査委員長に押しきられたと言われてもしかたないでしょうね。」

天野は、ワインを一息に飲み干すと、話を続ける。

「20年以上前に、私が積算協会の理事時代ですが、日本大学のN教授とお話しする機会がありました。N先生は当時大型プロジェクトのコンペに関して審査委員長や審査委員を勤められていた、いわばコンペ審査の権威でしたが、“コンペ審査において、コストが非常に軽視されている”ことに憤りを感じておられたようです。委員長でも仕組みを変えられなかったのでしょうかね。“天野さん、積算協会でコンペ審査におけるコスト評価について提案するべきだよ”と何度も言われたものです。当時の積算協会にはそのような力もなく、先生の期待に応えることは出来ませんでした。」



実際、コンペで当選して、実施設計に至ると予算を大幅に超過するという現象は、かなり多く見られたようです。コンペ当選作ということから、デザインを大きく変更することも出来ず、結果として、発注者と施工者が応分に超過分を負担するといった状況も珍しくはなかったと聞いています。

現在は、設計段階でコストマネジメントを行うことは、設計者にとっても利益をもたらすという認識が広まってきましたが、まだまだコストは発注者とゼネコンがどうにかしてくれるといった考えが設計者に残っていると感じることも多いですね。この悪しき風潮を改める絶好の機会だと思いますよ。」

桐山が引き取って。

「一般国民として感じたのですが、建築家はコストに責任をもっていないと認識されたのではないかと心配です。

審査委員長の会見で、住宅を例にとって話をされていました。デザインをした段階では当然コストがオーバーするもので、設計を進めていきながら調整する。しかし予算をオーバーすることもあるだろうから、その時は発注者に負担していただかなければならない。そのような趣旨の説明を聞いて、先ほどのように受け取れたのですね。これが真意だとしたら、がっかりしますね。

また、基本設計と実施設計を担当した設計者や

ECI方式で設計段階から参画したゼネコンについて、その努力が適切に評価されなかったという点も残念ですね。」

◆ 工事金額の混迷

天野が続けて。

「当選案を基本設計に落とし込み、概算積算を行った結果、3,000億円以上の金額が算定された。しかし、この金額が公になるのは最近のことですよ。大臣の国会答弁で出た数字だそうですが。この時点で、関係者は危機感を持たなかったのでしょうかね。」

「今宮プロジェクトでは、CMrが市に報告し、市は素早く動き出しましたね。」

新川が発言する。

「新国立も面積縮小など、様々な検討を加えたといわれていますが。しかし、その後に発表された金額が混乱に拍車を掛けましたね。床面積を25%削減し、3,000億円が1,852億円さらに1,699億円そして1,625億円になったと公表されましたが、少なくとも建築の技術を身につけた者にとっては、疑問符だらけの数字ではないでしょうか。この金額は、設計者が算定したものだと言われましたが、現在進行中の検証委員会において、発注者側が単価等を調整した、つまり非常に低価格に設定したというニュアンスで新聞報道されましたね。この記事が真実だとすれば、金額の急激な変化も十分説明がつけられます。何か今宮プロジェクトを思い起こさせますね。」

天野の説明を受けて、

「当初設計者が3,000億円で概算したものが、ゼネコンの見積で3,000億円、内容を変更して2,520億円となった推移は十分納得できますね。これであれば、心無い中傷にさらされた設計者やゼネコンも、かなり名誉回復するでしょうね。

それにしても、このプロジェクトについての情報公開は非常に少なかったですね。2年前に、3,000億円という事実をはっきり公開すれば、その時点で設計を白紙に戻すことも可能であったと考えられます。まあ、巨大な空母の舵を切るようなもので、なかな



か大変だったでしょうが、隠蔽体質とマネジメントの欠除が結果的に傷口を広げ、税金の無駄遣いにつながったと、国民の多くは感じているのではないのでしょうか。」

新川もエンジンがかかってきた。建築技術者として誇りを持っている者は皆、怒りを感じていたのだろう。

◆ 精神主義と先送り体質

「もうひとつ気になったのが、精神主義というか、“一所懸命やれば目標を達成できる”といった考えですね。日本の設計者やゼネコンが頑張れば、キールアーチの問題も解決し、1,300億円も達成できるといった、審査委員長の問題先送り思考が建築界全体に強く根を張っているように思えます。建築が受注生産で、特にコストは後にならないと検証できないといった特性もありますが、事前に技術的な課題を解決しておくという工学では至極当たり前の思考が存在していない状況も見られますね。

以前、準大手ゼネコンが巨額な赤字決算をして話題となりましたが、労務費の値上がりという赤字理由の公表に対して、“何とかなるだろうと、ダンピング受注を繰り返した結果、何とかならなかった”という見方が業界の多くであったようです。私も、ゼネコン時代同じように“必死で頑張れば、必ず利益が出る”といった“いけいけどんどん号令”で結局赤字が累積した経験があります。東芝問題や太平洋戦争時の神風思想なども、根っこは同じだと思います。

このような風潮も根絶するいい機会でしょうね。

ああ業界の悪弊といえば、五輪エンブレムの白紙撤回もデザイン会の闇を垣間見させられましたね。なにしろ、コピペがデザイン界の常識といった、国民が唾然とする倫理観を見せられましたからね。おそらく、もっと真摯に独創性を追及しているデザイナーもいると思いますが、業界全体のモラルを疑われる事態でしたね。“業界の常識は社会の非常識”とは建築界にも当てはまるどころがありますからね。」

天野は、久しぶりにおでんに手を伸ばして、話し終えた。

◆ CMは？

金剛が手を上げ。

「ところで、新国立にはCMrがいましたよね。発注者支援業務といった名称でしたが、確か3社のJVでしたね。もっと活躍が目立ってほしいと思っていましたが、存在が見えてきませんね。おそらく、設計者やゼネコンと同様、裏では一所懸命努力をされていたと思うのですが。」

財前が続けて、

「発注者の体質が、技術者の力を発揮させないような環境にしたのかも知れませんね。それにしても、CMrが最も活躍する分野はコストマネジメントですから、ここが混乱してしまったのは本当に残念ですね。CMrの役割には、発注者の啓蒙といった側面がありますが、設計者やゼネコンが力を発揮しやすい環境をつくるよう、発注者に働きかけられなかったのかと思います。天野さんだったら、相当発注者とやりあったでしょうね。まあ、事情を知らない無責任な発言だと怒られそうですが。設計者とゼネコンは白紙で仕切り直しですが、CMrはそのまま継続と新聞に載っていました。新しい発注者の体制のなか、時間とお金について厳しい制約があるプロジェクトをぜひ成功に導いて、CMの存在感を示していただきたいと願っていますよ。」

「建築コスト管理士や建築積算士にも活躍してもらいたいですね。」

いつの間にか夜もふけてきた。今日はこれまでと、一同は乾杯をして散会となった。

次号に続く

この物語はフィクションであり、登場する機関・企業・団体・個人は実在のものではありません。

積算協会ホームページに掲載されています。